

中心市街地活性化とまちなかのDIY 美殿町ラボづくりの成果

出村 嘉史¹

¹正会員 岐阜大学工学部 (〒501-1193 岐阜市美殿町40, E-mail: demu@gifu-u.ac.jp)

2015年10月から2016年5月にかけて、市街地に岐阜大学の研究室（美殿町ラボ）をつくることを目指して、古ビルの一角を改修するプロジェクトが実施された。当初よりこの改修は、全て参加者による手作業によるもの（Do It Yourself）として目論まれた。それは、経費削減による実行のしやすさだけでなく、解体・測量・構想・計画・施工の一連のプロセスを全て経験することによる学習効果や、周囲の技術を持つ者に学ぶことによる各参加者のネットワークの醸成を期待したためである。ラボづくりのプロジェクトの完了後に実施した調査からは、改修のプロセスとともに人的ネットワークが変化して濃厚になる過程が明らかになった。

キーワード：中心市街地の活性化、地方都市、岐阜大学 美殿町ラボ、DIY、ソーシャルネットワーク。

1. はじめに

(1) 研究の目的と背景

2015年10月から翌年5月にかけて、筆者の所属する岐阜大学 工学部 社会基盤工学科都市・景観研究室では、市街地の拠点創るために、ボランティア参加者によるDIY（Do It Yourself 手作り）を企画して築40年余りの古ビルを改修した。当初よりこの改修は、全て参加者による手作業によるものとして目論まれた。それは、経費削減による実行のしやすさだけでなく、解体・測量・構想・計画・施工の一連のプロセスを全て経験することによる学習効果や、周囲の技術を持つ者に学ぶことにより参加者が相互にネットワークを醸成させることを期待したためである。果たして、一連のプロジェクトによって唯一無二の拠点空間をまちなかに出現させることができ、今後のまちづくりへの実効的な参画として、大学に何ができるか期待されている。

一方で、一連の創造プロセスの中に、市街地が持続的に活力を得るための重要な視点を得た。すなわち、プロセスを経る毎に、参加者相互の人的つながりが醸成されていく事象が確認された。市街地における主体相互の信頼関係が構築される過程を明快地に描くことができ、それらのプロセス一つ一つの有用性を確認することができ、また自覚的に効果的なプロセスを設けることができるだろう。本研究では、上記の実践的事例を題材として、その実施による人的ネットワークにおける変容を描き、持続的活性化のための基盤づくりとして説明することを目的とする。

(2) 中心市街地活性化策と評価方法

近年の中心市街地が衰退する問題は、既に人々の共通の認識になって久しい。1998年には、国の総合的施策として「中心市街地における市街地の整備改善及び商業等の活性化の一体的推進に関する法律」（以下「旧中活法」）、「大規模小売店舗立地法」（以下「大店法」）が制定され、「都市計画法」とあわせて「まちづくり三法」といわれた。2006年には、実行力のある組織によってコンパクトシティ構想に基づいた中心市街地を形成することを想定して、中活法が見直された。これに従い、内閣は中心市街地活性化の基本方針を示し、実施する市町村はこれに準拠する中心市街地活性化計画をそれぞれに設けることとなった。これらは内閣総理大臣の認定を受けて実施されることとなる。それらの進捗状況は、毎年評価して報告することになっている。

この評価に用いる項目は、明確な客観性を持つよう計量可能なものが選択される傾向にある。例えば、2014年の報告として提出された項目は、図-1¹⁾の通りである。

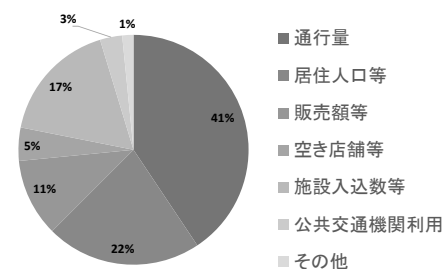


図-1 中心市街地活性化計画を実施する自治体による2014年度目的達成評価に用いられた項目

注目したいのは、評価の内容や割合ではなく、何を評価項目にしているかである。これらの項目は、施策が功を奏して活性化した状態であれば、十分に達成されるはずのものばかりである。通行量、居住人口、販売額、施設入込数、公共交通機関の使用頻度に関しては、健全な市街地であれば十分な数が得られると予想され、空き店舗数は減少するはずである。しかし、施策後直ちに活性化状態へ短期的に移行するのであれば問題ないが、現状までに各市街地が経験してきたように、短時間では容易に望ましい結果を出すことができない項目であると見られることもできる。少なくとも、そこへ至るプロセスや活性化するメカニズムの良否を見極めるものにはなっていないことは、問題であると考えられる。

本研究では、このような計量可能な項目として効果を評価することではなく、達成した状態を記述することでその先の活性を評価する方法を試みる。そのために、ソーシャルネットワーク分析手法を援用して、後述する2タイプのネットワーク描画を作製し、考察した。

(3)美殿町

対象とする取組みのサイトである美殿町は、岐阜市の中心市街地である柳ヶ瀬地区の東外れにあたる。ここでは、本取組みにとっての先進事例があり、2012年に建築設計事務所のミュキデザインが、家具店の所有する空きビルへ移転することをきっかけに同時入居者を募り、そのメンバーによるDIYを含めた空きビル全面改装を行っている。「まちでつくるビル」と名付けられたこのビルを拠点として、美殿町には若手のクリエイター、デザイナーが集まる界隈が形成しはじめた。この商店街には、こうした動きを積極的に受け容れる素地があり、これまでの人的ネットワークと新規のネットワークが比較的友好的な関係をつくっている。ただし、この町を含め、市街地全体的に空き家の数は未だほぼ減少していない。

2. 美殿町ラボづくりの実践

本研究の対象とするこの動きは、現在市街地から離れた郊外に位置している岐阜大学を、少しでも市街地へ戻す草の根的取組みである。その狙いは、都市の多様性の中に、任意に行動する時間を持つ主体である学生や大学教員などを加えることである。しかしながら、一度大規模に郊外移転を行った大学が、全学的な方針として大挙して市街地へ移転することは容易ではないので、出来る限りコストダウンしたやり方で、最大の効果を上げる先例を設けることを目指した。

2015年7月によい条件の古ビルを見つけた。まちなか

のリノベーションに積極的に取り組むようになったミュキデザインと筆者（大学研究室）との間で、役割の確認が行われ、東京に住む不在家主との交渉と建物の水回り・コアの部分の改修（工費を家賃に含み込み長期分割で支払えるようにした）をミュキデザインが実施し、筆者ら大学側は残り全ての工事について設計・計画・施工を行うこととした。それまで無関心であった家主は、この遊休不動産を活用する一連の取り組みに興味を持った。

ある程度まで条件の整った同年11月より始まった実践のプロセスは、表-1に示す通りである。基本的な枠組みは、スケルトンになるまで内装を解体した後に、測量・デザインを行い、床張り・壁づくり・棚づくりなどを実施するというものであったが、一つ一つ手作業で実践していく中で、プランの微修正は度々行われた。

表-1 美殿町ラボづくりのプロセス

Vol.1	2015/11/07	解体	poster
Vol.2	2015/11/13	解体	poster
Vol.3	2015/12/06	解体	poster
Vol.4	2015/12/23	解体	poster
	2015/12/24	廃棄	
	2015/12/29	左官職人下見	
	2016/01/14	計画	
Exc.1	2016/01/16	付知 製材所打合せ	
	2016/01/17	測量	
	2016/01/21	打合せ	
	2016/01/28	掃除	
	2016/02/08	打合せ	
	2016/02/11	掃除・廃棄	
	2016/02/14	廃材DIY	
	2016/02/18	水道工事	
	2016/02/19	打合せ	
	2016/02/20	ペンキ塗り	
	2016/02/21	測量	
	2016/02/22	水準測量	
Vol.5	2016/02/26	ペンキ塗り	
	2016/02/27	ペンキ塗り	poster
	2016/03/02	ペンキ塗り	
Vol.6	2016/03/05	ペンキ塗り	poster
	2016/03/06	ペンキ塗り	
	2016/03/13	ペンキ塗り	poster
	2016/03/19	左官職人打合せ	
	2016/03/20	根太づくり	
	2016/03/22	根太づくり	
	2016/03/24	杉床板張り練習	poster
	2016/03/25	窓刷新	
	2016/03/28	根太づくり	
	2016/03/29	家主と宴席	
	2016/04/07	壁面掃除	
	2016/04/08	梁修復	
	2016/04/09	根太づくり	
	2016/04/10	根太づくり	
	2016/04/13	根太づくり	
	2016/04/14	根太づくり	
	2016/04/15	根太づくり	
Fin.1	2016/04/16	杉床板張りワークショップ vol.1	
Fin.2	2016/04/17	杉床板張りワークショップ vol.2	
	2016/04/18	左官準備	
Fin.3	2016/04/23	左官ワークショップ	poster
	2016/04/24	左官職人仕上	
Exc.2	2016/04/26	付知 棚板づくりワークショップ	
Fin.4	2016/04/30	本棚作り準備	
	2016/05/01	本棚作り準備	
	2016/05/02	本棚作り準備	
	2016/05/03	本棚作り準備・掃除	
Fin.5	2016/05/04	本棚作りワークショップ vol.1	poster
Fin.6	2016/05/05	本棚作りワークショップ vol.2	
Open	2016/05/06	オープニングパーティー	poster

これらの実践の中で、貫かれたルールは、以下のものであった。すなわち、出費は最小限にする、そして、外部からの強力は最大限に受け容れる、というものである。出費を抑える理由は、特別な多額の予算を準備しなくとも、可能な取り組みであることを示し、リノベーションには多額の資本が必要であるという思い込みを払拭して追従者を増やす狙いがあるためである。そのために、可能な限り参加者自身の手作業によって実施するのだが、参加者のインセンティブとして、一つの空間を総合的に創りあげるその行為自身が、多様な学びの機会に満たされていて魅力的であり続ける必要があった。多様な学びは、所属の異なる多様な参加者が相互に行うことが持続のために重要であり、外部からの協力と参入をむしろ求めた。特に職人的立場からの協力には、製材所、大工、左官職人、電気工、建築家、デザイナーなどがあり、技の存在や有効性を示しつつ参加者を指導しながら、作業過程を共有した。手法として取り入れたDIYがそれらを可能にした。参加者にとって、これが「楽しい」場であることが重要であり、あらかじめその楽しみを期待して参加できるように、作業日程の主要部分では、事前に参加者募集のポスターを作製し、雰囲気を与えつつソーシャルメディアFace Bookで呼びかけた。協力を望むことができる志向性のある参加者を、予め選択していた行為であると振り返ることができる。



図-2 事前に参加者募集をしたポスターの例

3. 人のつながりを見る基本手順

(1) ソーシャルネットワーク分析 (SNA)

ソーシャルネットワーク分析とは、社会的関係性をネットワーク理論を用いて分析することであり、グラフ理論やコンピューティングの分野において、既に多く研究されてきた。この分析により、社会の背後にある見えない構造を描き出すことができる。社会を構成する主体

間のつながりからなる網状の構造をソーシャルネットワークと言い、パットナム²⁾はそれが互酬性や信頼の規範の源泉になると指摘した。ソーシャルネットワーク分析の研究では、コミュニティ内の紐帯に重きを置くボンディングか、コミュニティ間をつなぐブリッジングのどちらが重要であるかの議論が行われてきた経緯があるが、近年ではいずれもそれぞれの役割があり、その相互関係が重要とされるようになってきた。多くの場合、1モードネットワークとして、すなわち人物をノードと見るネットワークで表現される。一方で、人物の所属は社会構成の重要な情報を含むことから、2モードネットワーク、すなわち人物と所属をそれぞれノードとするネットワークによって描かれるアフィリエーションネットワークという手法も使われる。本研究では、その両者を用いて、現象の説明を試みる。

先行する研究³⁾では、アフィリエーションネットワークの状況について、以下の着想を得ている。すなわち、所属のノードを中央にして人物のノードに囲まれているアフィリエーションセントリックな構成と、その逆であるパーソンセントリックな構成に、性質上の違いがある。パーソンセントリックな場合は、その人物が次に多様な行動を展開する可能性が高く、組織化の初期段階に多くみられるアフィリエーションセントリックな場合は活動がある均衡状態を保っている可能性が高い、という視点である (図-3)。

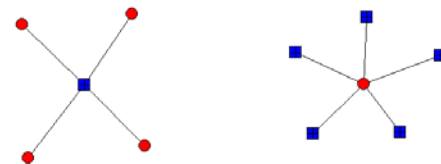


図-3 アフィリエーションセントリック (左) とパーソンセントリック (右) の構成。
四角のノードは所属を、丸のノードは人物を表す。

(2) ソーシャルネットワークの可視化

コミュニティの構成を知るための基本情報は、一連の美殿町ラボづくりの作業に参加した総員 (64名) に対するアンケート調査により得たものである。ここでは、参加者がどのようにどの作業へ参加したのか、そして彼らが所属する組織やコミュニティ、特に新たに関係した組織を聞いた。さらに、この作業の中で初めて顔を合わせた人物のうち、名前を覚えている人を調査した。名前の記憶はその人物に興味をもって「つながり」を持ったことの指標とした。質問内容は、一連の改修終了後直ちに参加者へ送られ、質問の意図が理解されていないと思われる回答に対しては、再度説明とともにアンケート回答を依頼した。結果、全ての参加者からの回答を得た。

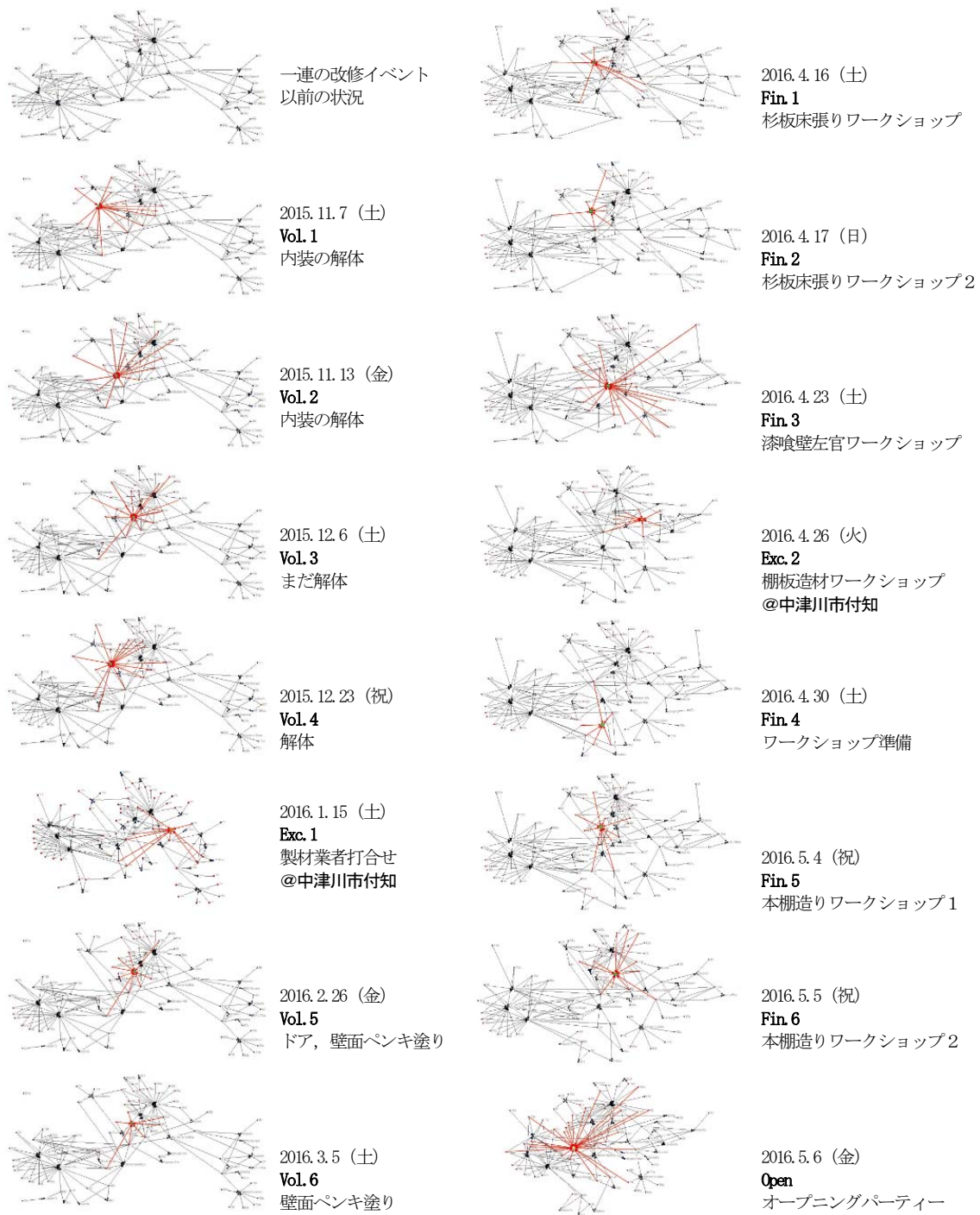


図-5 アフィリエーションネットワーク構成の変容 (赤線は各イベントへの参加を示す)

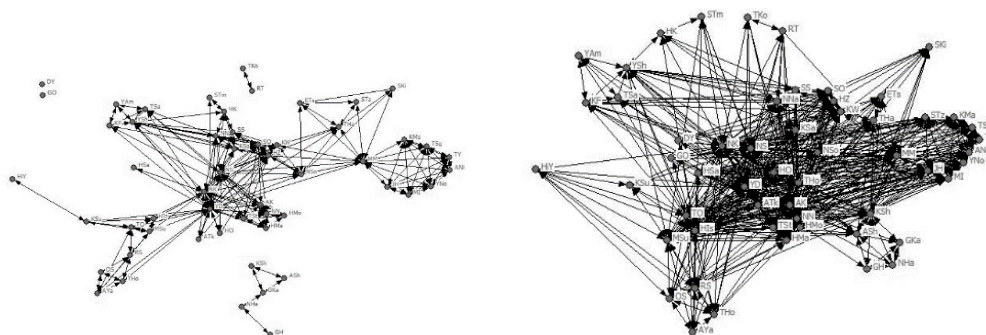


図-6 美殿町ラボづくり参加者相互のソシオグラムの変化 (左：事前，右：事後)

形成に至り、次の機会を積極的に期待する様子が見て取れた。アフィリエーションネットワークの緩やかな変容の水面下で、直接的な人的ネットワークの変化が起きているものと考えられる。

それは1モードネットワークの描画によって確かめることができる。図-6は一連のイベント事前と事後のソシオグラム（人と人を結ぶネットワーク）の変化を示したものである。先に示したように、事後（右側の図）に加算された紐帯は、事後にアンケートによってその人の名前を記述できた場合につないでいる。これらから、新たな紐帯をつなぐ潜在機会は、アフィリエーションネットワークにおける疎な事象あるいはstructure holeにおいて効果的に創られ得ると解釈できる。そうした箇所企画する共同作業は、ネットワーク空間に磁場や重力場のような「場」を形成しているものと考えられる。

(2) 次の段階を発展させる鍵となる動き

図-5では、ゆるやかな構成の変容が観察できるが、次の段階に影響するいわゆる鍵となるステップ（動き）がいくつか把握できる。

はじめの構成は、研究室、美殿町、職人関連の3グループが明確に分かれている（図-7）。これらは、これまでそれぞれが干渉することの少なかったそれぞれのフィールドを表している。ただし、YD（筆者）はそれぞれに一つずつのアフィリエーションを介してつながっている状態である（図中の α 及び β ）。 α は美殿町のミュキデザインが主催する「おとなの学校」である。これは、毎月最終水曜日の19時に周辺で興味を持った社会人を対象に開講しているイベントである。YDが美殿町に空き家物件を見つけたのも「おとなの学校」がきっかけであり、これを介してミュキデザインのMSおよび周辺のクリエイターたちと面識があった。一方 β は、YDと中津川市付知町在住のNSoが2015年8月に企画した「岐阜の石積み学校」である。全国の学生や若手社会人を対象に、伝統の空石積みの手法を石工から習う合宿であったが、岐阜県の山間地である付知には、石工だけでなく数寄屋大工や左官職人、そして木について知り尽くした製材業者など多様なものづくりの技が集積している地区でもあった。石積み学校にて若者のクリエイティブな活動に興味を抱いた付知の人々と互いに何か期待する関係が出来ていた。それらのネットワーク上の位置付けは、先述のstructure holeともいふべき紐帯の疎な部分にあたる。

図-8は16段階のプロセスのうち、6段階目および12段階目を実施した付知町における動きを合わせて表示した構成である。Exc.1では、YDが学生やボランティア参加している建築家のKShらと付知町の製材業者AKiに会いに行っている。そこで使用する材によって内装の質を

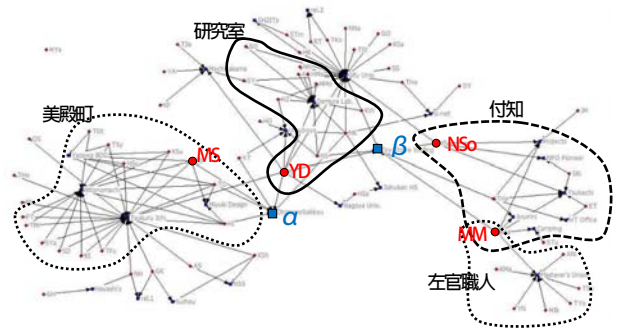


図-7 アフィリエーションネットワークの初期構成

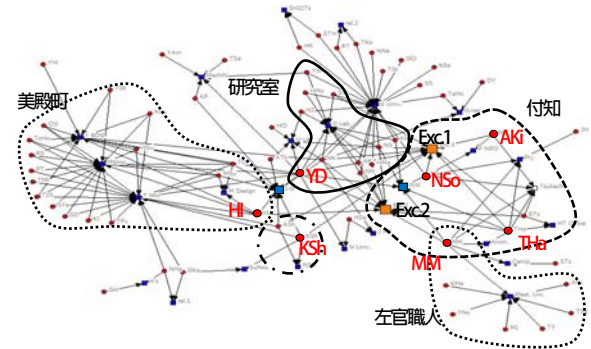


図-8 Exc. 1およびExc. 2における構成

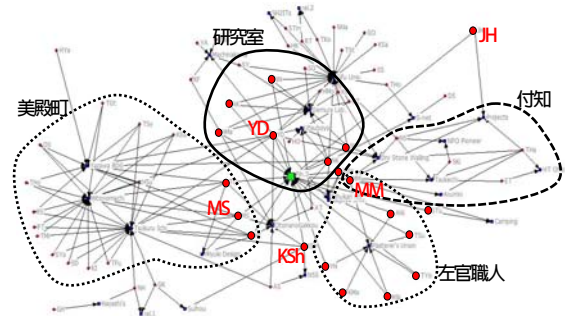


図-9 Fin. 3（漆喰左官ワークショップ）における構成

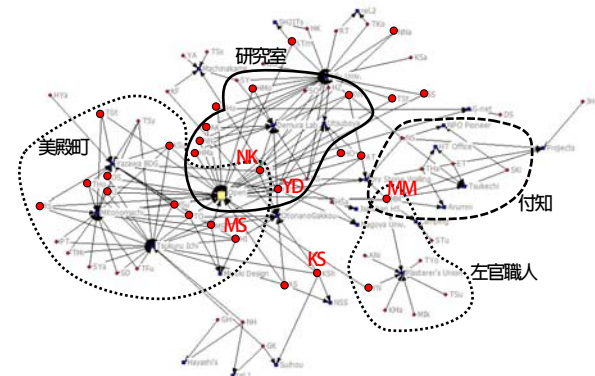


図-10 オープンパーティーにおける構成

高める話合いが持たれた。Exc. 2で中心となる付知の数寄屋大工THaは、それまでの美殿町ラボづくりのプロセスをSNSで共有しており、他の付知在住の参加者と同様にに関わる機会を求めており、栗材による棚板の造材という極めて専門的かつ興味深いワークショップを企画してくれた。ミュキデザインの職員HIもこれに積極的に参

加している。地方中核都市である岐阜のプロジェクトに対して、90 kmほど遠方の山間地にあるコミュニティが、極めて直接的に融合していく様を読み取ることができる。

全段階の中で、Fin. 3は最も参加者が多いイベントとなった(図-9)。YDと付知の左官職人MMは、早い段階からこのイベントを企画しており、MMが所属している岐阜県左官業組合のメンバーへ呼びかけて、漆喰塗りの左官壁づくりを参加者が職人から習うことのできるワークショップに仕立てることになった。当日には、左官業組合と振興のある漆喰(材料)業者の社長 JHが任意で駆けつけ、材料のつくり方などを実践的にレクチャーしてくれた。このイベントは、終日同じ空間で作業を行うものであり、参加者その中で作業の協力関係や自然な会話を初対面の人々との間で展開できる場がになっていたと考えられる。

図-9より、YD、MMおよびMSはパーソンセントリックな位置を維持しており、次の動きを興しやすい状況であると考えられるが、この判断基準が正しければ、KShも同様の位置に達していることが分かる。実際にKShは、この後Fin. 4以降に中心的企画者になり、KSh自身のアフィリエーションによる他のネットワークも含めてクリエイティブな作業を行っている。すなわち、ここで融合的コミュニティにおけるイベントでは、1つのパーソンセントリックにあたる主体が中心となって実施されたあと、よい人的ネットワークが築けたならば、その周辺にいたやはりパーソンセントリックな主体が続けてアクションを起こしやすい状況が生まれる、いわゆるパーソンセントリックの伝播(図-11)を現象として観察することができた。

最後に図-10は、3つのグループが互いに紐帯で結ばれている状況が、最終段階のオープニングパーティーではできていることを示している。特に美殿町と研究室の間の紐帯は非常に密になっている。このパーティーには、それまで参加したメンバーの多くが集合して、完成を喜ぶとともに、この拠点を使った次の段階の話を積極的にしていた。

4. 結論

以上のことより、ネットワーク構成の視覚化によって、美殿町ラボづくりのような、共同作業のDIYによるまちなかの空間づくりの効果として、以下の事項が見出された。

- ・ アフィリエーションネットワークでは、紐帯が密に集合するいくつかのグループの間に疎であるゾーンが出来るが、このゾーンが新たなコミュニティ形成を促すつながりを生み出す適地である。

- ・ パーソンセントリックな位置にあたる個人は、新しいアイデアにより次のアクションを起こしやすい状況にある。そういった立場の誰かがアクションを起こすことで、新たなパーソンセントリックな立場が生まれ、次のアクションが伝播することがある(図-11)。
- ・ 中心市街地の活性化策において、焦点を当てるべき重要な項目は、何かを共同で作ることのできるプロセスと、それを起こす「場」である。アフィリエーションネットワークの構成は、次のアクションを起こしやすい状況にある人がそれに気付くためのツールになる可能性がある。

これらの知見は、刹那的な活性を評価するものではなく、持続的に豊かなネットワークの上における地方都市の中心市街地の活性を考える際、見逃してはならない事項になるものと考えている。

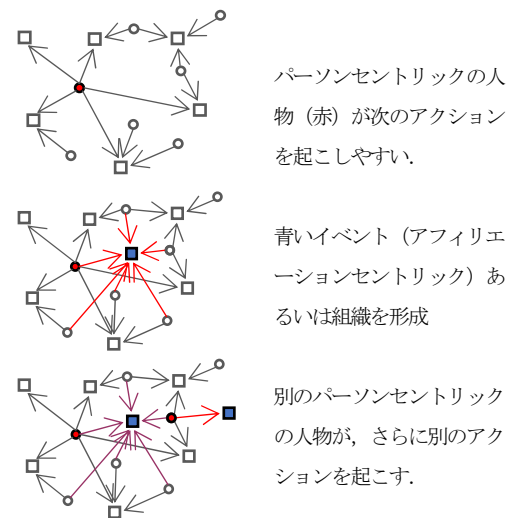


図-11 パーソンセントリックの伝播仮説

謝辞：一連の美殿町ラボづくりのプロセスに関わって頂いた多くの方々に謝意を表す。

参考文献

- 1) 内閣府地方創生推進室：中心市街地活性化基本計画平成26年度最終フォローアップ報告，2015
- 2) Putnam, R.: *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, Simon and Schuster, 2000
- 3) Iwamoto, K., Ishida, H., and Demura, Y.: Visualization of the Diversity of the Community using Social Network Analysis in Iwamura and Yanagase, *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, vol.10, pp. 47-56, 2015
- 4) Burt, R.S.: The Network Structure of Social Capital, *Research in Organizational Behavior*, Vol.22, pp.345-423, 2000
- 5) Granovetter, M.: The Strength of Weak Ties, *American Journal of Society*, Vol.78, Issue 6, pp.1360-1380, 1973